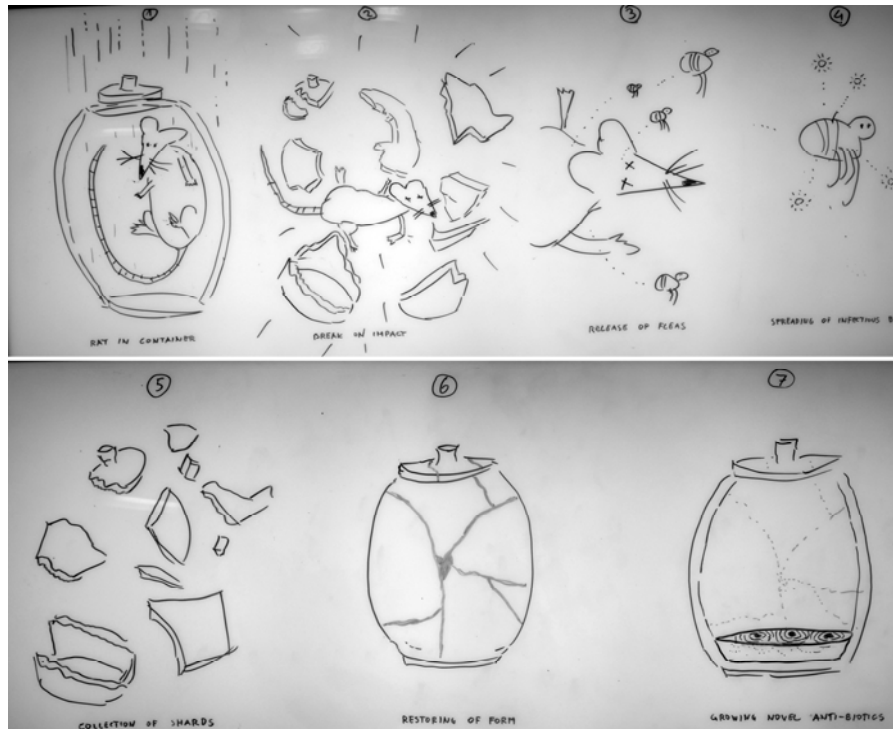


今号の表紙



Georg Tremmel (BCL) & Matthias Tremmel “RESIST / REFUSE”

(陶器、金つぎ、寒天、土壌から分離された放線菌)

これは生命研究に関わる過去の歴史の暗部を踏まえ、どうそれを捉え直すのか、をめぐる表現だ。

第二次世界大戦中、日本軍は毒性を持つバクテリア（ペスト菌など）をネズミに感染させ、ノミとともに陶製の壺に入れて敵地に投下することを目的とする生物兵器を生産し、一部は実際に使用されたと言われている。ネズミを入れる壺は、日本各地の陶芸工場で生産されたが、その目的は伏せられ、工場には単に「ネズミが入る程度の大きさの壺を造るように」とだけ通達されたらしい。

バイオメディア・アートで国際的な活動を展開するBCLのゲオアグ・トレメル（東京在住）は、オーストリア在住の陶芸家マティアス・トレメルと協働し、この生物兵器用陶器を再び制作することにした。ゲオアグは、マティアスに当時の要請のように、単にネズミの入るくらいの壺を多数の自由に作ってもらうように依頼した。それらを高所から投下して破壊する。ここまでは、凄惨な過去の暗部のミニマルな再現だ。しかし、作家たちはそこから未来への一条の光に転生させることを思いつく。

破片を集め、古来陶器の修復に使われてきた伝統技術、金つぎ（漆で繋ぎ、金泥で修復部分を整える技法。場合によっては、金つぎは新たな造形価値をもたらす）を用いて、修復するのだ。そして、その中に寒天培地を入れ、土壌に含まれるバクテリアを培養する。そこでは、多くの感染症を防ぎ、第二次大戦中に実現した抗生物質を生み出すバクテリアが増殖することになる。破壊から復元へ、災いから癒しへ。金つぎはその移行のメタファーなのだ。

本シリーズは、2017年 Ai Koko Gallery（東京・両国）にて映像や解説パネル（上の写真）とともに展示された。

Georg Tremmel & Matthias Tremmel

Georg Tremmel はオーストリア出身、東京在住のアーティスト。福原志保とともに科学・デザイン・アートを横断するアーティストィック・フレームワーク BCL を立ち上げ、特にバイオテクノロジーの発展が社会に与えるインパクトを中心に国際的な活動を展開している。生命美学プラットフォーム metaPhorest のメンバーであり、東京大学、早稲田大学にも籍を持つ。Matthias Tremmel はオーストリア在住の陶芸家。BCL とのコラボレーションは本作が初めてであった。 <http://bcl.io/about/>

(解説：岩崎秀雄，協力：AiKoko Gallery)